阿里山の黄道光 (2)

本田　實

阿里山の天候は宵が駄目でも東天が毎曉美しく晴れてくれるのは非常に幸であつた．毎曉 1^h30^m に起き出でゝ觀測所の屋上に立てば，新高山の上に銀河があざやかで北天にはポラリスは内地よりはるかに低く，23° の高さに輝き，それの屬する小熊座がやゝもすると山へ引かゝりそうである．

空は物凄いまでに美しく澄んだ空．はるか南天には内地では見られない“りうこつ座”の α 星が美しくまたゝいてゐる．

毎曉天候のゆるす限り，3回乃至4回の觀測をつゞけて9月19日になつた．例の如く，1^h30^m に起き出でゝみると昨18日までは淡く見にくかつた光帶が非常に見易くなつてゐるのに氣が付いた．其の日は見易くなつたと思ひながら，觀測を終へたが，翌20日いよいよ明るく見易く且つ幅廣くなつてゐる，著しい事實に驚き，山本先生宛下の電文を打つた．

「昨曉より光帶急激に增光，且つ幅廣くなりたり約12°，内地の觀測異狀無きや否や」之は9月20日7時40分發信で，急報227號に報ぜられた通りである．しかし光帶はこの日よりこの通り見易くなつたのであるが，黄道光の方には別段著しい變化は認めなかつた．

光帶の幅が廣くなつて來た．15—16日の頃，7° 8° 位に觀測してゐた幅が20日に 12° と觀測してゐる．そして25—26日になつて，17—18° から 20° 近い幅の光帶は素晴らしかつた．要するに阿里山での收穫は黄道光は非常に明るいこと，そして光帶が19日になつて急激に見易く幅廣くなつたこと，私は特にこの光帶の變化を興味をもつてみてゐる．それほど著しい感じを與へた．

觀測のことは之位にして觀測所の様子を少し書きませう．

觀測所は，阿里山高山觀測所と云い，臺灣總督府の經營にかゝる，海拔2400米の阿里山のうちの万歳山と云ふ山の頂上に建てられてゐて，昭和8年の開設である．ペンキの色も清々しい箱形の家で4人の所員が毎日觀測に當つてゐられる．觀測は一般の氣象觀測であるが，大きな地震計室もある．そして觀測用のクロノメータは毎日10時(西標)の船橋の報時で調整されてゐた．

この觀測所の主任の人を伊東さんと云い年若い溫厚な方で，外に地震計係りの人と他に2人の人が毎日6回の觀測を遂行してゐられる．殆どすべての機械が自記裝置になつてゐた．

又毎朝空が晴れてさへゐれば，直徑30cmばかりの赤い風船を屋上からとばせて，小さな望遠鏡で高度と方向を計つてゐられた．ぢつとみてゐるとだんだん昇つてゆくにつれて小さくなり，遂には小さな黑點になつてしまふ．1000米はまだ良くみえる．1200米では非常に見にくゝなり，1300米まで肉眼で見えてゐた．望遠鏡をのぞいてゐる人が之がまだ見えてゐるのかと驚いてゐた．方向と高度は2分毎に記錄されてゐた．

9月26日，急に思ひ立つて，日本の最高峯新高山上で黄道光をみるべく，6時，阿里山より登山鐵道の人となつて出發した．沿線に紅白の美しいコスモスの花が咲き亂れてゐるのはあまりにも可憐であつた．兒玉驛で汽車を捨て，それより徒歩にて7時間，新高下の警察署に到着した．もう非常に寒く，部室にはストーブがどんどん薪かれて居た．13時警察より2時間ばかりで頂上に登れるときゝ，雨の中を一人登る．道はけはしい，富士標高位より上には何も生へてゐない．只岩ばかりである．15時頃雨と激しい風と霧の中に頂上に立つた．頂上は5米に8米位の廣さで非常にせまい．あたりは霧で何も見えない．杖をもつてゐる手はかぢかんで來て非常に寒かつた．あまり寒いので直に下山，其夜警察に一泊し，翌27日1時に起きて再び登り頂上で觀測せんと勢込んでゐたが，1時も曇り，2時，3時と曇りにて，やつと4時過ぎ，晴れそうになりかけたので大急ぎにて懐中電燈をたよりに登りはじめたが，雲と薄明とで殘念ながら黄道光はみることが出來なかつた．

しかし新高頂上の御來光はあまりにも美しく且つ豪華であつた．眞紅から

黄金に變る雲の色，たつた一人の客を迎へるにはあまりにも新高は豪華であつた．

6時下山，警察を7時50分に發して强行軍，觀測所に歸りついたのは14時36分だつた．

9月28日は下山の準備に費いやした．

29日早曉の觀測を終へて，9時20分阿里山發下山の途についた．この日，阿里山にはもう白く霜が下りてゐた．觀測所の氣溫は 2° だつた．

阿里山は冬，下の平地は夏，だんだん下りるにしたがつて溫度は上昇し，4時10分嘉義驛着．もう非常な暑さだつた．直にバスで吳鳳廟へ詣で，暗くなつてから北回歸線標を訪れる．大急ぎで彰化に至り，松本氏の宅へ參り，30日1時50分の汽車の出るまで休ませていたゞく．

1時，松本氏に送られて，驛に至り，汽車にのり寢臺に入る．夜明け頃汽車は臺北の近くを走つてゐた．基隆着7時50分，直に高千穗丸に乘船する．船から陸へ張られた紅白のテープが切れて，10時6分船は出て行つた．港外に出るともう波は狂ひ立つて，船は大きくゆれ出した．門司に歸るまで船は暴風雨の中を大ゆれにゆれながら進んだ．途中でデツキに出る勇氣もなく，勿論船の位置を尋ねに行く勇氣もなく，苦しさにあへぎながら船室にころがつてゐた．船は豫定より9時間ばかりおくれ，10月2日夜10時頃門司入港．直に荷上げ，3日3時30分神戸へ向け出帆．風は强かつたが秋晴の瀨戸內海を進んで行つた．天高く晴れて內海の秋色はあまりにも美しかつた．

風强く，內海でさへ9000トンの船がゆれて，夕闇せまる神戸岸壁へ18時無事停船した．三ノ宮驛でみた高い北極星．そしてネオンの光り，それは阿里山とはあまりにもかけ離れてゐた．大阪着，船醉のつかれを叔母の家に休めて，京都へ5日正午に歸り，6日の談話會に出席した．電車のひゞき，廻る廣告燈，こんな都會の姿を山の中「阿里山」の人々は想像するだらうか？　黃道光があんなにも美しい阿里山の人々は!!　（終り）

⊙ オリオンの　星座は高く　新約の　鐘冴えわたる　クリスマスの夜